

森林吸収量の算定方法等に関する検討会（第6回）概要

日時：令和8年3月4日（水） 9：30～12：00

場所：日本森林技術協会 日林協5F会議室（オンライン併用）

本年度最後の委員会として、今までの検討内容について総括を行うとともに、算定方法の整理および今後の課題について検討を行った。

議題（1） NFIデータの精査

NFIデータの精度確保の観点から、以下の基準によりデータを抽出し、野帳等との照合による精査を実施する。

- ・胸高直径 200cm 以上の立木
- ・齢級別平均成長量の標準偏差 2σ 超のデータ

主な意見：

- ・データの多くは、野帳からのデジタル入力時の入力ミスによる可能性が高い。
- ・成長量の異常値は単木ではなくプロット単位で確認することが重要である。
- ・今後の NFI 調査では、過去調査データとの整合確認を含めた QA/QC の強化が必要である。

整理結果：

- ・野帳との照合等により入力ミスの修正を行う。
- ・修正が困難な場合は棄却処理により対応する。
- ・現在の NFI 調査で運用されている入力閾値（データチェック基準）を過去期データにも適用して精査を行う。

議題（2） 調査周期

NFI 調査は設計上 5 年周期であるが、実際の調査間隔にはばらつきがあるため、成長量算定における調査間隔の扱いについて年度単位法および月単位補正法を比較検討した。

主な意見：

- ・成長量は季節変動の影響を受けるため、月数を基にした補正は適切ではない可能性がある。

整理結果：

- ・年度単位で成長量を算定する方法を採用する。
- ・調査年月日の不整合については、野帳および発注資料を用いて確認・修正を行った。

議題（3） 他国の算定方法や国際ルールとの整理関係

NFI データの精査結果を踏まえ、成長量の異常値に対する棄却基準について検討を行い、以下の基準を整理した。

- ・林種・齢級別平均成長量の $+2\sigma$ 超を棄却
- ・前回調査との比較で成長量が 2 倍超のデータを棄却

主な意見：

- ・成長量減少は伐採や災害等による可能性があるため、減少側の棄却基準を設けることは困難である。

整理結果：

- ・成長量の過大値のみ棄却対象とする方法を採用する。
- ・本方法は吸収量推計を保守的に評価する観点からも妥当。

議題（４）FM 率算定方法

NFI データを用いた吸収量算定方法として、入れ子方式および分期法の 2 方式について比較検討を行った。

主な意見：

- ・インベントリ報告では報告年の 2 年前までの排出・吸収量を提出する必要があるため、外挿期間を最小化できる方法が望ましい。

整理結果：

- ・外挿期間が最小となる分期法を採用する方針とした。

今後の課題：

- ・分期法では各期のサンプル数が全国の 1/5 となるため、林種・気候帯等の算定カテゴリの整理が必要。

議題（５）FM 率算定方法

森林経営管理（FM）の判定方法について検討を行い、以下の 3 指標を組み合わせた FM 率算定方法を整理した。

- ・法的枠組みに基づく FM 率
- ・施業履歴に基づく FM 率
- ・Ry（相対収量比）に基づく FM 率

今後の課題：

- ・実データを入手し、FM 率を計算
- ・過去の FM 率の推計方法について検討

議題（６）拡大係数

拡大係数については、NFI 格子点数による加重平均により計算する方法を採用することとした。

今後の課題：

- ・林齢構成の高齢化を踏まえた拡大係数区分の細分化

議題（７）不確実性評価

森林吸収量の不確実性評価方法について検討を行った。

主な意見：

- ・実務上は林種別ではなく、全国一本の森林吸収量として不確実性を示すことが妥当である。

議題（８）土壌炭素および ARD 把握方法

NFI データを用いた林種・気候帯別の土壌吸排量係数の整理方法について検討を行った。

今後の課題：

- ・実算定および現行方法との比較分析
- ・算定システムへの組み込み

NFI 格子点を基準とした ARD 把握方法への移行について検討を行った。

今後の課題：

- ・実算定の実施
- ・算定システムへの組み込み

今後の主な検討課題

- ・現在の NFI 調査で運用されている入力閾値（データチェック基準）の過去期データへの適用
- ・算定カテゴリ細分化に伴うデータ数の減少を念頭に、分期法における算定カテゴリの整理
- ・FM 率の算定と算定システムへの組み込み
- ・拡大係数の高齢級における区分の細分化
- ・土壌炭素量および ARD 算定方法の確立
- ・各種検討要素の算定システムへの統合・算定

(以上)